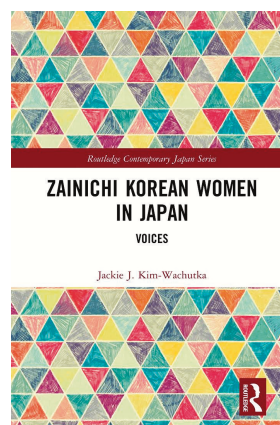


ジャッキー・J・キム・ヴァフトウカ  
『在日コリアン女性——声』

Jackie J. Kim-Wachutka, *Zainichi Korean Women in Japan: Voices*

『在日コリアン女性——声』は、ジャッキー・J・キム・ヴァフトウカの二〇〇五年に刊行された著書『隠された宝石——日本における一世代の韓国・朝鮮人女性の生活史』(*Hidden Treasures: Lines of First-Generation Korean Women in Japan*, ジャッキー・J・キムとしての執筆)の続編のようなものである。いずれの著書も、エスニック(民族的)な、あるいはディアスポラとしての韓国・朝鮮人女性(在日、または在日コリアン)の声を丹念に収集、記録している。本書評で取り上げる著書は、在日コリアン一世の記憶にはじまるものまで広げられている。前作では大阪での声を中心に記録していたが、本書では歴史的にも労働者の街として知られ、東京の南に位置する川崎での声に地理的焦点を当てている。いずれの研究にお

ジョン・リー



Routledge, 2019

いても、アイデンティティーに纏わる記憶と語りの破片を確固とした声を通して伝えることで、在日コリアン女性のプロソポグラフィ(人物研究)を描き出している。在日コリアンに関する日本語での著作は、その増え続ける文献目録が示唆するように、数えきれないほど多くあるように思える。在日コリアンの生活のほぼ全ての面を網羅しつくすほどの本が刊行されているものの、その中でもキム・ヴァフトウカの二部作は、英語での在日コリアン女性に関する著作としては、同分野への貴重な貢献であるといえる。本書では、パーソナル・ナラティブ(一人称での個人の経験に関する語り)が、著者の研究データ・手法・理論を形作っている。素材としてのパーソナル・ナラティブは間違いなく本書の最大の長所であり、その学術的貢献に最も大きく寄与している。ロングイ

ンタビューやオーラル・ヒストリーの筆記録は、時に何ページにもわたる。なかなか知る機会のない在日コリアン女性の世界を英語圏の読者に向けて垣間見せてくれるという点においては、歓迎すべきことといえよう。これらの記録は、特にその大多数が日本統治時代初期に来日したコリアン女性の第一世代にとつて最も重要なテーマ、すなわち著者の言葉を借りれば、「女性は例外なく男性に次ぐ者である」という単純な理由から、困難や犠牲を強いられる運命にある」(p.15) ことを指摘するものだ。本書に記された歴史にも重要かつ止むことのない辛苦の記憶は、こうした在日コリアン女性一世の生き様に鋭く切り込んだ観点をもたらしめている。

第一世代を特徴づける貧困と差別の集合記憶は、若い世代の在日コリアン女性の場合になると、一貫性のない複雑なアイデンティティや語りへと変貌する。著者自身も充分承知しているように、現代日本における韓国・朝鮮の人々には、明確な、あるいはシンプルな必須要素・共通項というものは存在しない。そして、過去のどの時点においても、その多様性はあてはまるものといえよう。朝鮮半島を分断した国家に映し出される長年の政治的分裂以上に、世代、または人種エスニック編成(例えば、在日韓国・朝鮮籍の片親と日本籍の片親を持つ「混血」の人)による根本的な差異がある。著者も要約するように、「多くの在日コリアン女性たち

が、自身を「<sup>あいだ</sup>間」の自己」と形容する」(p.158)。だが、一体どの自己のことを指しているのだろうか。

他の手法を犠牲にしてまでパーソナル・ナラティブに依拠する著者の姿勢は、『在日コリアン女性——声』を損なうものである。読者には、歴史的、文化的、社会的背景や文脈に関する情報はほとんど与えられない。在日コリアンの人々が実に多様であることを著者が意識しているにもかかわらず、移民の歴史に基づいたこれらの分裂・隔たりについて、読者が知らされることはほぼない(おそらく今日の日本において最もよく知られる韓国・朝鮮人の存在は、韓国からの近年の移住者かもしれないが、既存の在日コリアンの人々に想定される民族意識との共通点はほぼみられない)。在日コリアン女性・男性の多くが、「普通の」日本人女性・男性と同じように生活し、自身の民族的背景や独自性を封印していることだけを考えてみても明らかだが、民族としての独自性の明確な現れや、学歴や富の不平等による歴然とした隔たりについてもまた、読者はほとんど知らされることはない。著者は分析の際、欧米の理論家たちの珠玉の知恵を織り交ぜようとするが、文脈(理論的観点)を示さないことが、その他大勢の在日コリアン女性の生活を無視することにつながっている。典型調査を行うことはまた別問題かもしれないが、読者は著者が誰の話を聞いていないのかを知りたいと思うに違いない。恐らく若い日コリアン女性たちの多くは、

自身たちを本書の中に見出すことはないだろう。

確かに著者は、パソナル・ナラティブ以外の二つの資料にも目を向けている。第五章では、在日コリアン女性による二冊の記録『鳳仙花のうた』と『地に舟をこげ』について掘り下げて研究している。在日コリアン女性の文学的表現についての考察としては参考になるものの、それらが在日コリアン女性による受賞歴のある小説、あるいは高評価を得た映画であろうとなかろうと、その他のより広く普及している文化表現形態の考察を切望せずにはいられない。第八章では、民族衣装である伝統的なチョゴリに目を向け、「チョゴリを身に纏うことは、在日コリアン女性に日本統治下の従属の歴史や民族としての独自性の否定、そして晒し者や差別のターゲットになるリスクを思い出させた」(p.175)と結論づける。さらに特筆すべき点としては、ほぼ全ての在日コリアン女性にとって(北朝鮮関連の民族組織により運営されている朝鮮学校に在籍している人々は別として)、伝統衣装を身につけるのはごく稀なことであり、結婚式やその他の非日常的な機会でしか着用しないことが挙げられる。

ジャッキー・J・キム・ヴァフトウカの著した『在日コリアン女性——声』は、日本語を知らずとも在日コリアン女性に関心を持つ読者に、記述・翻訳された声を通じて、興味深い実相の数々を垣間見せてくれる。著者の二部作は、英語圏における在日コリ

アン女性の研究に大きく寄与するものである。

(翻訳：片岡真伊(東京大学東アジア藝文書院特任研究員)  
\*本稿は *Japan Review* 35 (2020) に掲載された英文テキストの日本語訳である。